



Title	フォーカシング創成期の2つの流れ：体験過程尺度とフォーカシング教示法の源流
Author(s)	田中，秀男，池見，陽
Citation	Psychologist：関西大学臨床心理専門職大学院紀要，6：9-17
Issue Date	2016-03-08
URL	http://hdl.handle.net/10112/13417
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

フォーカシング創成期の2つの流れ ～体験過程尺度とフォーカシング教示法の源流～

Two Streams in the Early Period of Focusing: The Sources of the Experiencing Scales and Focusing Instructions

田中秀男 池見 陽
関西大学大学院心理学研究科

Hideo TANAKA, Akira IKEMI
Graduate School of Psychology, Kansai University

◆要約◆

ユージン・ジェンドリンがフォーカシングを提唱したきっかけとして、カール・ロジャーズのもとで行われていた以下の2つのリサーチ結果が、著作『フォーカシング』（Gendlin, 1981）で挙げられている。「1. 心理療法の成功と相関があったのは、クライアントが“何を”話したかではなく、“いかに”話したかであった」「2. 心理療法が成功するか／失敗するかは、ごく初期の面接から予測できてしまう」。実は、この2つは、ジェンドリンに先行する研究者たちによる別のリサーチの流れだったことがわかってきた。上記の1.がEXPスケール（体験過程尺度）の源流であり、上記の2.がフォーカシング教示法の源流である。本稿では、こうした2つのリサーチの流れがジェンドリンに継承されることで、どのように合流して現在の「フォーカシング」となったのかを提示する。

キーワード：ロジャーズ、クライアント中心療法、必要十分条件、ジェンドリン、EXPスケール

Abstract

Carl Roger's group conducted two types of research studies that motivated Eugene Gendlin (1981) to advocate Focusing: 1. "Success in therapy correlated not with what the clients talked about, but with how they talked." 2. "Success or failure in therapy could be predicted from the early interviews." In fact, these two types of research studies were derived from different streams conducted by researchers who preceded Gendlin. The first type of research study above is the source of the Experiencing scales, and the second type of study is the source of Focusing instructions. In this article, the author attempts to show how Gendlin developed these two streams, merging them together to form what is now called "Focusing".

Key Words: Carl Rogers, Client-Centered Therapy, The necessary and sufficient conditions, Eugene Gendlin, EXP scales

1 はじめに

ユージン・ジェンドリン (Eugene Gendlin, 1926-) は、シカゴ大学カウンセリングセンターのスタッフ (1952-58) やウィスコンシン大学での統合失調症治療プロジェクトのディレクター (1958-63) として頭角をあらわし、のちに「フォーカシング」を提唱した心理療法家として一般に知られている。元々哲学者であり、現在も現役の哲学者であるジェンドリンが、アメリカのカウンセリング心理学のパイオニア、カール・ロジャーズ (Carl Rogers, 1902-1987) のもとをどのような経緯で訪れたかについては、田中 (2004) で論じられている (p.71)。

ジェンドリンがフォーカシングを提唱するきっかけとなったリサーチ結果は、断片的にはあるが今まで紹介されてきた。たとえば、ジェンドリン本人による実践的主著『フォーカシング』(Gendlin, 1981) の冒頭では、以下のように解説されている。

…セラピーの成功した患者をセラピー・セッションの記録からいともたやすく選び出せることがわかった。こうしたまれな患者たちは、セラピーの時間に他の患者たちとどう違うのか。… [中略] …患者たちが何を話すかという点に違いはない。違いは患者たちがいかに話すかという点にある。(Gendlin, 1981, p.3)¹

こうしたリサーチの中に私たちを最も悩ませた事実がひとつあった。それは、自分の内面で決定的な行為を行った患者を初期の2回の面接までに選び出せるという事実である。初期の面接を分析するだけで、始めから成功か失敗かを予測できることがわかったのである。(Gendlin, 1981, p.4)

しかし、Gendlin (1981) は啓蒙書という性格のため、誰がどこまでどのような側面の先行研究を行っていたか、ジェンドリン本人がどのリサーチにどの程度関わっていたのかについては、つまびらかにされていない。また、今日、フォーカシングとして定着しているものから振り返って見た場合、それぞれのリサーチがどのような位置づけにあるのかは、最近の文献でも明確にされていない。

そこで、本稿では、日本語で紹介されていない文献、もしくは、近年になって日本語に訳された文献を紹介し、これらを統合的なかたちで整理することによって、フォーカシング創成期のリサーチの様々な流れを提示する。本稿の見解を予めかいつまんで論じておきたい。クライアントが「いかに」話したかに関するリサーチには、ジェンドリンは最初から主導的な立場で参加していた。しかし、「ある種のクライアントたちへの治療は失敗することが予測できてしまう」ことに関するリサーチには、ジェンドリンは最初から参加してはおらず、しかも、このリサーチ結果に当初は抵抗を示していた。したがって、両リサーチの流れを区別し、それぞれが現在のフォーカシングのどの側面を支えているのか、その対応関係を改めて問い直すべきだというのが本稿の見解である。

フォーカシング創成期のリサーチの流れを区別するため、本稿では、まず、「何を」話したかから「いかに」話したかへの尺度の取り方の転換を概観する。次に、「失敗が予測されるクライアント」に関するリサーチ結果とそのインパクトを追う。続いて、以上二つの先行するリサーチがジェンドリンによってどう継承され、合流したかを確認する。これにより、最後に、ロジャーズから、ジェンドリンのいわゆる「兄弟子」たちを経て、ジェンドリンへと至る研究の流れの捉え直しを提唱する。

II 「“いかに”話したか」の先行研究：フィードラー・シーマン・ジェンドリンら

1. 「“何を”話したか」から「“いかに”話したか」へ
「“何を”話したか」から「“いかに”話したかへ」の尺度の取り方の転換について、田中(2004)は、1956年にジェンドリンらがアメリカ心理学会で初めて発表したりサーチ「セラピーにおける過程と結果のカウンセラーによる評定」(Gendlin et al., 1960a)に注目している。以下、このリサーチが、のちの体験過程尺度(以下EXPスケール)から振り返って、どのように先駆けとなっていたかということからその内容を概観したい。

1956年のリサーチは、先行研究としてフレッド・フィードラー(Fred Fiedler, 1922-)のリサーチ(Fiedler, 1950)とジュリアス・シーマン(Julius Seeman, 1915-)のリサーチ(Seeman, 1954)が挙げられている(Gendlin et al., 1960a, p.213)。Fiedler(1950)の結論は、「治療の成功は、セラピストの学派の違いよりも、セラピストの熟練度と相関がある」というものだった。Seeman(1954)の結論は、「クライアントが治療関係自体をとりわけセラピーの話題にしていたかは、治療の成功とは相関がない」というものであった(田中, 2004, p.75)。

1956年のリサーチにおいて、治療の成功と相関がなかった項目は、クライアントが「治療関係をとりわけ話題にしていたか」「過去の出来事を話題にしていたか/現在のことを話題にしていたか」だった(Gendlin et al., 1960a, p.211)。これは、セラピストがよって立つオリエンテーション(ロジャーズ派・フロイト派等)によって違ってくると予想される変数だったのである(田中, 2005, p.72)。フィードラーの研究は、セラピスト側ではなくクライアント側の発言を変数にとるというかたちで変容・継承され、シーマンの結果は追試された。これら成功と相関がない変数は、クライアントが「何を」話した

かに関する変数だった。

1956年のリサーチにおいて、治療の成功と相関があった項目は、クライアントが「治療関係から新しく重要な体験が生じたか」「感情を直接的に『表現した』か/感情について『報告した』か」だった(Gendlin et al., 1960a, p.211)。これら成功と相関がある変数は、ジェンドリンらによる新しい尺度で、クライアントが“いかに”話したかに関する変数だった。

2. これらのリサーチの限界

上記1956年の学会発表には、その基盤として前年にシカゴ大学カウンセリングセンターのディスカッションペーパーにて発表された理論論文(Gendlin et al., 1955)がある。この理論論文では、クライアントの話の内容とは別の変数を取るべきという仮説が提示されていた(Gendlin et al., 1955, p.2)。

しかし、Gendlin et al. (1955)には、難点もある。セラピーが進みさえすれば、クライアントの体験過程は、自ずと「構造拘束的」から「プロセス的」になるとされる(Gendlin et al., 1955, p.9)。今日のフォーカシングの立場と比較すると、比較的素朴で、楽観的である。なぜなら、ある種のクライアントはセラピーで失敗が予測されるという事態は想定されていないからである。

III 失敗が予測されるクライアントに関する研究：カートナーの研究とそのインパクト

1. 従来のカートナーの紹介

本稿IIで挙げたリサーチ(Gendlin et al., 1960a)の流れとは別の流れが、シカゴ大学学内における、ロジャーズ派の別の研究者によって行われていた。「ある種のクライアントたちはロジャーズ派のセラピーで失敗が予測される」という研究がそれであり、リサーチの主導者はウィリアム・カートナー(William Kirtner, 1920-)である。

ジェンドリンによるカートナーの回想 (Gendlin, 2002) は、原文の日本語訳 (ジェンドリン, 2006) があるだけでなく、日本語二次文献においてもいくつか紹介されている (諸富, 2009, pp.40-41; パートン, 2006, p.65)。しかし、カートナーの研究がロジャーズ派の中でどのようなインパクトをもたらしたかに関して詳細に明らかにした日本語文献はない。一方、近年の英語圏の文献では、カートナーの業績に言及したものとして、Parker (2014) が挙げられる。しかし、Parker (2014) が、EXP スケールの先行研究としてカートナーの研究に言及している (pp.259-260) 点で、筆者とは見解が異なる。

本稿は、フォーカシングの先行研究として、カートナーの研究を、Parker (2014) とは別のかたちで位置づける。具体的には、カートナーの研究は、EXP スケールの先行研究ではなく、フォーカシング教示法の先行研究だというのが本稿の見解である。なぜなら、EXP スケールは、「クライアントが“いかに”話したか」を測る尺度であり、本稿 II で論じたように、カートナーの研究結果が出る前にジェンドリンが主導的な立場で参加していたリサーチに源流を求められるからである。そして、当初このリサーチは、失敗が予測されるクライアントがいるとは想定されていなかったからである。

2. カートナーの研究詳細

ウィリアム・カートナーは、カール・ロジャーズの教え子だという意味では、ジェンドリンのいわゆる「兄弟子」に当たると言える。カートナーは、1955年に修士論文「パーソナリティ変数の関数としてのクライアント中心療法における成功と失敗」(Kirtner, 1955) をシカゴ大学人間発達コミッティーに提出している。その3年後、共同研究者デズモンド・カートライト (Desmond Cartwright, 1924-) との共著というかたちで、カートナーの修士論文の主要部分が心理療法誌に公刊されている (Kirtner &

Cartwright, 1958)。

カートナーの研究成果を、公刊された論文をもとにまとめてみたい。リサーチの結論は、「セラピーの期間と結果は治療開始時におけるクライアントのパーソナリティ構造と関連している。最も顕著な差異は、こうした尺度上に見いだされる成功グループと失敗グループ間の差異であった」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.264) というものである。上で「こうした尺度」と言及されているもののうち、のちのフォーカシングの発展から振り返ってみると、注目すべきは尺度 IV として挙げられたものであろう。尺度 IV は、「能力感：状況に十分に対処できるという感じから、状況に対処する内的資源の無力感と欠如まで」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.260) とある。たとえば、セラピーで成功するグループは、「感じられた不安の原因や解決を自己の内部に求める」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.263) 傾向があるという結果であった。また、セラピーで失敗するグループは、「感じられた不安の原因や解決を外に求める」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.263) 傾向があるという結果であった。

失敗するグループの傾向を今日の心理療法の解説書から具体例を挙げてみたい。池見 (1995) は、「自己理解が深まらない場合」として、次のようなセラピストとクライアントの会話例を挙げている。彼との旅行を急に彼からキャンセルされて行けなくなったクライアントに「どう感じているんですか？」とセラピストが問いかけても、「感じるも何も、そういう言い方がヒドイと思うのよ」とクライアントは述べる。急に行けなくなったことへの彼の言い訳について「言い訳されると、どう感じているんですか？」とセラピストが問いかけても、「とにかくズルイと思いませんか？」とクライアントは述べる (池見, 1995, pp.86-87)。池見 (1995) は、あくまで EXP スケールを解説する前置きとして上記の例を挙げている。しかし、上記の例は、EXP スケールが開発される前のカートナーの尺度でも、

治療の失敗が予測されることであろう。なぜなら、上記のクライアントは、「感じられた不安の原因や解決を外に求め、状況に対処する内的資源が欠如している」グループに入ることになるからである。

のちにジェンドリンは、心理療法が効果的でない様式（ineffective modes）として、「知性化（intellectualizing）」と「外在化（externalizing）」の2つを挙げている（Gendlin et al., 1968, p.217）。カートナーの研究は、2つの様式のうち、後者の「外在化」を研究した先駆けだと言えるであろう。

3. カートナーの研究のインパクト：ロジャーズとジェンドリンの反応

次に、ロジャーズ派内における、カートナーの研究の位置づけを考察してみたい。ロジャーズは、カートナーの修士論文提出と同じ年に、有名な必要十分条件、6つの条件をカウンセリングセンター・ディスカッションペーパーにて提唱したばかりであった（Rogers, 1955; Rogers, 1959）。ところが、カートナーの成果は、ロジャーズの必要十分条件だけでは成功しないクライアントたちがいることを示し、ロジャーズが提唱した内容を早くも覆すような研究結果だったのである。

しかし、カートナーの結果に対するロジャーズとジェンドリンの反応は意外であり、興味深い。ロジャーズの6条件の中でも、とりわけ、セラピスト側の態度条件である「受容・共感的理解・一致」の3つが、現在では中核三条件（本山ら, 2015, p.i）と呼ばれて重視されている。ロジャーズとジェンドリン、それぞれが最終的に築き上げた理論からすれば、セラピスト側の条件だけではうまくいかないクライアントがいるという結果に対し、反対したのがロジャーズで、賛成したのがジェンドリンという予想が成り立ちそうである。しかし、実際には、ロジャーズとジェンドリンそれぞれの当初の反応は、むしろ逆だったようである。

カートナーの修士論文提出の翌年、シカゴ大学カウンセリングセンターでの出来事をジェンドリンがのちに以下のように回想している。出来事とは、カートナーの研究を一部紹介したディスカッション・ペーパー（Cartwright, 1956）がカウンセリングセンターのスタッフの元に届いたことである。

1956年のこと、カートナーから研究結果を配布されたとき、カウンセリングセンターのスタッフは一同激怒した。とても信じられなかったのだ。研究によれば、自分たちが会っているクライアントには、成果が上がらないとあらかじめわかっている人たちがいるのだという。面接が始まって数回で、このケースが失敗するかどうか、おおよそ見当がついてしまうというのである。きっと何かの間違ひでは、そうにちがいない、私たちは口々に言った。

（Genldin, 2002, xviii）

自分たちスタッフがこれ以上面接を続けても結果は変わらない、そういう意味合いのデータを突きつけられてジェンドリンらは信じられなかったと言える。というのも、ジェンドリンは当初このリサーチに加わっていなかったからカートナーの結果は予期せぬものだったからである。

ただ、そんな中で、ひとりロジャーズだけがじっと黙っていた。そしてこう言ったのである。「事実はいつだって味方だよ（Facts are always friendly）」。ロジャーズのオフィスに行き、カートナーの研究のことで私が喰ってかかろうとしたところ、ロジャーズからはこう言われた。「今回の研究結果が、きっと次の研究への足がかりになると思うよ」（Genldin, 2002, xviii）

ロジャーズはだれよりも早く、カートナーの

研究結果を冷静に受け止めていたのである。しかし、ロジャーズの公刊論文を見た限り、そういう印象はない。ロジャーズが必要十分条件を公刊 (Rogers, 1957) した際、6つの条件を提示したあとに「省略された重要なこと (Significant Omissions)」という見出しのもと、次のような補足文を入れている。

ここに挙げた条件が当てはまるのはある種のクライアントだけだ、とは述べていない。また、クライアントのタイプが違えば、治療して成果をあげるには別の条件が必要になる、とも述べていない。

(Rogers, 1957, pp.100-101)

ところが、カートナーの問題提起は、「クライアントのタイプが違えば、治療して成果をあげるには別の条件が必要になる」という性質のものであったのである。そこで、ロジャーズは次のような脚注を急遽挿入している。

先ごろカートナーが仕上げた研究の結果は、私が立てた仮説を覆そうとするものである。… [中略] …だが、カートナーの研究が確かなものとははっきりするまでは、今のところ、私は自分の仮説にこだわりたい。

(Rogers, 1957, p.101)

以上がロジャーズの公式発言である。あたかもロジャーズ個人が研究結果を受け入れられなかったかのような書き方である。

しかし、実際には、当初カートナーの研究結果を受け入れられなかったのは、ロジャーズよりもジェンドリンの方であった。

部屋を出ようとして、ふたりドア口に立っていたところで、ロジャーズは私の肩にぼんと手を置き、ぐっと力を入れながらこう言ってくれたのである。「ほら、ここから先をどう進んでいけばいいかはきっと“君が”

見つけ出す、私はそう思っているよ (Look, maybe *you* will be the one to discover how to go on from this)」。おそらくロジャーズは、次へのステップを見出すメンバーの一人として私のことを言っただけなのだとおもう。だが、私はもっと深いところでその言葉を受けとめていたのかもしれない。(Gendlin, 2002, xviii)

むしろ、クライアント側の条件を見出すように、ジェンドリンの背中を後押ししたのがロジャーズだったと言えよう。

4. カートナーの研究の限界

繰り返すが、カートナーはあくまで「ロジャーズの必要十分条件だけでは、セラピーが成功しないある種のクライアントたちがいるのではないか」と問題提起しただけである。そうした失敗が予測されるクライアントたちにセラピストがどう働きかけたらセラピーの軌道に乗せることができるのか、その解決案までは示していなかった。

IV 2つの研究の流れの合流

治療の成功と相関がなかった「何を”話したか”」に関する研究は本稿Ⅱで論じたかたちで終了する。一方、治療の成功と相関があった「“いかに”話したか”」に絞ってその後の研究が進められる。本稿Ⅱで挙げた「感情の『表現』／『報告』」はのちの体験過程尺度 (experiencing scale) のレベルの高低に受け継がれる。ジェンドリンの著作目録 (Depestele, 2007) において、experiencing scale という用語がタイトルに初めて挙がるのは、ウィスコンシン大学に移ってからの Gendlin et al. (1960b) である。これに改良が加えられ、EXP スケールというかたちで一応の完成を見たのが、Klein et al. (1970) である。

一方、本稿Ⅲで論じたカートナーの問題提起

に対し、ジェンドリンが解決案をもって応えるのはやや時間がかかったようである。ジェンドリンはウイスコンシン大学へ移る前に、博士論文をシカゴ大学哲学部に提出している (Gendlin, 1958; Gendlin, 1962a/97)。しかし、この論文には、フィードラーやシーマンの名前が挙がっているにもかかわらず、カートナーの名前は一度も挙がっていない。ジェンドリンはウイスコンシン大学へ移った後になって、カートナーの尺度を従来の神経症圏のクライアントから精神病圏のクライアントへ適用を試み、同様の成果を挙げている (Gendlin, 1962b, p.207)

ウイスコンシンでの統合失調症プロジェクトの成果として、ジェンドリンは有名な論文「人格変化の一理論」(Gendlin, 1964) を執筆・公刊する。Gendlin (1964) において、「“いかに” 話したか」のりサーチ結果から、成功するクライアントの中で起こっている現象を記述して「フォーカシングの4つの位相」と名づける (Gendlin, 1964, p.115)。4つの位相とは、「1. 心理療法における直接のレファレンス」「2. ひらけ」「3. レファレントの動き」「4. 全面的な適用」である (Gendlin, 1964, pp.115-122)。加えて、これら4つの位相が「自己駆進的感情過程 (the self-propelled feeling process)」(Gendlin, 1964, p.123) としてクライアントに起こってこそ、セラピーは成功すると論述する。心理療法が成功するためのクライアント側の条件を論述できたという意味で、カートナーの問題提起にジェンドリンはこの時点でようやく応え始めたといえる。フォーカシング創成期の2つの源流がGendlin (1964) で合流するようになったと言えよう。

次の段階として、ジェンドリンは、フォーカシングの4つの位相が起こりにくい話し手を手助けするためのマニュアル (focusing manual) に着手する (Gendlin et al, 1968, p.239)。つまり、従来は治療の失敗が予測されたクライアントをどうセラピーの軌道に乗せたらよいか、その一解決案である。ただし、Gendlin et al

(1968) の段階でのマニュアルは、30秒後に「その感じ全体に注意を向けなさい」、1分後に「ある感じを追い続けなさい」というような、まだ非常に機械的で自動的な教示の羅列に過ぎなかった。これに改良が加えられて、その結果、のちの「フォーカシング教示法 (Short Form)」(Gendlin, 1981) へと発展するに至るのである。

V おわりに

クライアントが「“いかに” 話したか」に関するりサーチには、ジェンドリンは最初から主導的な立場で参加していた。しかし、「ある種のクライアントたちへの治療は失敗することが予測できてしまう」ことに関するりサーチには、ジェンドリンは最初からは参加しておらず、しかも、このりサーチ結果に当初は抵抗を示していた。

「“いかに” 話したか」を調べただけでは、どういときにセラピーが成功したかが明らかにされただけだったかもしれない。カートナーの先行研究があったからこそ、セラピーが成功しないと思われていたある種のクライアントにどう働きかけるか、その一つの解決案として、フォーカシング教示法をジェンドリンは提唱できたのであろう。

一般に、ロジャーズとジェンドリンの相異として、次のようなことが論じられている。「ロジャーズの理論がセラピストの態度を中心にすえているのに対し、ジェンドリンの理論はクライアント個人の体験過程が中心である」(田村, 1990, p.16)。この見解は、今日のパーソン・センタード及びフォーカシング指向心理療法の研究者間でおおむね共通理解となっているものであろう。今後も、この見解は支持され続けるであろうし、筆者もこれに異を唱えるつもりはない。ロジャーズとジェンドリンの関係は、二人が結果として理論化したものだけを見ればそのとおりである。しかし、実際のところ、当初は、カートナーによる「クライアント側に別の

条件が必要」というリサーチ結果をあっさり認めたのがロジャーズであり、抵抗を示したのがジェンドリンだった。このことを考えると、リサーチの経緯とその結果としての理論との関係はそう単純ではなかったと言えよう。

注

- 1) 以下、本稿における英語引用文の日本語訳は、既訳を参照しつつも、訳語を統一する都合上、すべて筆者訳である。

文 献

- Cartwright, D. S. (1956): A synthesis of process and outcome research. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), 2(19).
- Depestele, F. (2007): *Primary bibliography of Eugene T. Gendlin* (2007 revision): URL: http://www.focusing.org/gendlin/gol_primary_bibliography.htm
- Fiedler, F. (1950): A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic, nondirective and Adlerian therapy. *Journal of consulting psychology*, 14, 436-445. フレッド・フィードラー 伊東博 (訳) (1960): 精神分析、非指示的方法、アドラー療法における治療関係の比較 伊東博 (編) 『カウンセリング論集 第1巻 カウンセリングの基礎』誠信書房 239-261.
- Gendlin, E. T. (1958): *The Function of Experiencing in Symbolization*. Doctoral dissertation. University of Chicago, Department of Philosophy.
- Gendlin, E. T. (1962a/97): *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. Evanston: Northwestern University Press. ユージン・ジェンドリン 筒井健雄 (訳) (1993): 『体験過程と意味の創造』ぶっく東京.
- Gendlin, E. T. (1962b): Client-centered developments and work with schizophrenics. *Journal of Counseling Psychology*, 9(3), 205-212.
- Gendlin, E. T. (1964): A theory of personality change. In Worchel & Byrne (Eds.), *Personality change*. New York: John Wiley & Sons. 100-148. ユージン・T・ジェンドリン 池見陽・村瀬孝雄 (訳) (1966): 人格変化の一理論 ユージン・T・ジェンドリン・池見陽 (著) 『セラピープロセスの小さな一歩：フォーカシングからの人間理解』金剛出版 165-231.
- Gendlin, E. T. (1981): *Focusing*. 2nd ed. New York: Bantam Books. ユージン・T・ジェンドリン 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) (1982): 『フォーカシング』福村出版.
- Gendlin, E. T. (2002): Forward. In Russell, D. (Ed) *Carl Rogers: the quiet revolutionary: an oral history*. Roseville: Penmarin Books, xi-xxi. ユージン・T・ジェンドリン 島瀬直子 (訳) (2006): 序文 デイビッド・ラッセル (編) 『カール・ロジャーズ：静かなる革命』誠信書房 i-xii.
- Gendlin E. T., Zimring F. (1955): The qualities or dimensions of experiencing and their change. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), 1(3). URL: http://www.focusing.org/gendlin/docs/gol_2139.html
- Gendlin, E.T., Jenney, R.H. & Shlien J.M. (1960a): Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. *Journal of Clinical Psychology*, 16 (2), 210-213.
- Gendlin E. T., Tomlinson T.M. (1960b): *Experiencing scale manual*. Unpublished manuscript.
- Gendlin, E. T., Beebe, J., Cassens, J., Klein, M., & Oberlander, M. (1968): Focusing ability in psychotherapy, personality and creativity. In Shlien, J. M. (Ed.), *Research in psychotherapy*. 3. Washington D. C.: American Psychological Association. 217-241.
- 池見陽 (1995): 『心のメッセージを聴く：実感が語る心理学』講談社
- Kirtner, W. L. (1955): *Success and Failure in Client-Centered Therapy as a Function of Personality Variables*. Master's thesis. University of Chicago, Committee on Human Development.
- Kirtner, W. L. & Cartwright, D. S. (1958): Success and failure in client-centered therapy as a function of client personality variables. *Journal of Consulting Psychology*, 22(4), 259-264. ウィリアム・カートナー & デズモンド・カートライト 伊東博 (訳) (1964): クライエントの人格変数による成功と失敗 伊東博 (編) 『カウンセリング論集 第3巻 カウンセリングの過程』誠信書房 239-261.
- Klein, M. H., Mathieu, P. L. Gendlin, E. T. & Kiesler, D. J. (1970): *The experiencing scale: A research and training manual*. Two volumes. Wisconsin Psychiatric Institute. 池見陽・吉良安之・村山正治 [ほか] (訳) (1987): 体験過程とその評定: EXP スケール評定マニュアル作成の試み 人間性心理学研究 4, 50-64.
- 諸富祥彦 (2009): フォーカシングの原点：その哲学の基本的特質及びロジャーズとの関係 諸富祥彦 (編) 『フォーカシングの原点と臨床的展開』岩崎学術出版社 3-41
- 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (2015): Introduction 村山正治 (監修) 『ロジャーズの中核三条件：カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致』創元社 i-vi.
- Parker, Rob (2014): *Focusing-Oriented Therapy: The*

- Message from Research. In Madison G. (Ed) *Theory and practice of focusing-oriented psychotherapy: beyond the talking cure*. London: Jessica Kingsley Publishers, 259-272.
- Purton, C. (2004): *Person-Centred Therapy: The Focusing-Oriented Approach*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. キャンベル・パートン 日笠摩子 (訳) (2006): 『パーソン・センタード・セラピー：フォーカシング指向の観点から』 金剛出版.
- Rogers, C.R. (1955): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), 1(5).
- Rogers, C.R. (1957): The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103. カール・R・ロジャーズ 伊東博 (訳) (2001): セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件 カーシェンバウム&ヘンダーソン (編) 『ロジャーズ選集 上』 誠信書房 265-285.
- Rogers, C. R. (1959): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.), *Psychology: A Study of Science*. 3, New York: McGraw-Hill. 184-256. カール・R・ロジャーズ 梶瀬稔 [ほか] (訳) (1967): クライアント中心療法の立場から発展したセラピー、パースナリティおよび対人関係の理論 伊東博 (編) 『ロジャーズ全集 第8巻 パースナリティ理論』 岩崎学術出版社 165-270.
- Seeman, J (1954): Counselor judgments of therapeutic process and outcome. In Rogers, C. R. & Dymond, R. (Eds) *Psychotherapy and Personality Change: Co-ordinated Research Studies in the Client-centered Approach*. Chicago: University of Chicago Press. 99-108. ジュリアス・シーマン 伊東博 (訳) (1967): セラピーの過程と所産に関するカウンセラーの判定 友田不二男 (編) 『ロジャーズ全集 第13巻 パースナリティの変化』 岩崎学術出版社 129-141.
- 田村隆一 (1990): フォーカシングにおけるフォーカサーリスナー関係と floatability との関連 心理臨床学研究, 8(1), 16-25.
- 田中秀男 (2004): ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (上): 心理療法研究におけるデイルタイ哲学の影響 『図書の譜: 明治大学図書館紀要』 8, 56-81.
- 田中秀男 (2005): ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (下): 心理療法研究におけるデイルタイ哲学の影響 『図書の譜: 明治大学図書館紀要』 9, 58-87.